

# YKKファスナー

日本が誇る世界ブランド

ズボンやスカートなどの衣料品はもちろん、靴や靴、漁網や防虫ネットといった産業用まで、あらゆる分野で使われているファスナー。今やほとんどのファスナーが YKK といっても過言ではないが、この世界ナンバー1の地位はどのように築かれたのだろうか。



## 商品開発 の背景 舞台裏

YKK の創業者吉田忠雄は、20 歳の時、貿易商になる夢を胸に富山県魚津から上京。中国陶器やファスナーの輸出入を手がける会社に勤めるものの、会社は4年足らずで倒産。吉田は在庫品のファスナーを引き取り、1934(昭和9)年にサンエス商会(吉田工業の前身)を立ち上げる。その後、江戸川区小松川に工場を建て、さあこれからという時に工場が空襲で焼失。魚津に疎開し再起を図る中、終戦を迎えた。

戦後、昔の仲間が次々に復員し、魚津工場が軌道に乗り始めた47(昭和22)年の夏、東京営業所に一人の米国人バイヤーが訪ねて来た。吉田は、5ミリ10インチの自信作を見せ1本9セントでどうかと持ちかけるが、一笑に付されてしまう。何とバイヤーは自分の持っているものを7セント40で買わないか、と言うのだ。

商品を見て、吉田は青くなった。機能、デザインともに比べものにならないほど優れていたからだ。吉田はこの時のことを後に「穴があったら入りたいとはこのこと。まったく目から火が出るような思いがしました」と振り返っている。

当時、日本のファスナーは手作り。まず、金属線から務歯(むし)と呼ばれる細かい歯を打ち抜く。テープ地を金属製の櫛で挟み、務歯を櫛の目に一つ一つ収め、それを手動のプレス機でかしめる。一方、バイヤーが持ってきた米国製ファスナーは、務歯の打ち抜きから植え付けまですべて機械で製造されたものだった。安価で高性能な米国製ファスナーが入ってきたら、日本のファスナー業界は壊滅的な打撃を被るに違いない——吉田は危機感をつのらせた。

## 機械化

生き残るには、米国製の機械を輸入するしかない。吉田は霞が関に通いつめ、49(昭和24)年暮、ようやく輸入許可を得る。翌年届いた機械は、期待に違わぬものだった。米国製のチェーンマシン(自動植え付け機)は、160人分の務歯打ち抜き・植え付け作業を、わずか6人でやってのけた。吉田はこのチェーンマシンを100台、国内の精密機械メーカーに発注。同年10月には月産100万本を突破、早くもファスナー生産日本一の座を手にした。

## 一貫生産 体制

量産体制を整えた吉田の次なる一手は、一貫生産体制の確立だった。54(昭和29)年に着工した黒部工場では、圧延伸線、熔解、染色、織機、鋅金、型工作、アルミ合金製造といった工場の建設が進められ、3年後の57年に完成。翌年には、黒部市生地(いくじ)に紡績工場も完成し、テープの材料となる糸に至るまで一貫生産が可能になった。

## 川上主義

この一貫体制には社内外から批判や反対の声もあったが、吉田は「YKKは確かにファスナーメーカーであり、決して紡績会社や伸銅会社ではない。だが、消費者に申し分のない品質のファスナーを安定して提供するには、ファスナーに最も適した材料を原料からつくるべきだ」こうした吉田の「川上主義」は原材料だけでなく機械の製作にも適用され、昭和33年からはチェーンマシンも全面的に自社生産となった

## 水密・気密 ファスナー

昭和50年代には、ファスナーの精密性、耐蝕性、強度を高めることによって、用途の開拓が進んだ。ビスロンファスナーなどの樹脂ファスナー群が、漁網や水中養殖用のカゴ、農業用のビニールハウスや米俵に代わる麻袋、防虫・防鳥ネットなど産業資材に用いられるようになった。

機能性を高めたファスナーの代表格といえば「水密・気密ファスナー」。宇宙服をはじめ、化学防護服、ダイビングスーツなどに使われているほか、巨大建造物の建設にも一役買っている。

## 社名

YKKの社名は、「サンエス商会」→「吉田工業」から平成6年に、吉田工業株式会社の英頭文字をとって社名変更した

ファスナーのことを普段、何と呼んでいますか？多くの方は、一般名詞である「ファスナー」。その他には、「チャック」とか、ジーンズについたものは、「ジッパー」と呼ばれたりしています。この3つは同じものだそうです。